

新聞を活用して、思考力・判断力・表現力を高める学習

指定校 1 年次 安曇野市立堀金中学校 湯本 将也 橋詰 恩

I 本校の新聞活用（N I E）の現状

1 生徒の実態（アンケートより）

全国学力・学習状況調査や 2 学年生徒に行ったアンケートでは、8 割ほどの家庭では新聞を購入しているが、「ほぼ毎日読んでいる」という生徒は 1 ～ 2 割ほどで、半数の生徒は「ほとんど、または、全く読んでいない」状況であり、新聞への興味関心は低い。新聞の良い点について「じっくり読めるし細かいところまで知ることができる」「漢字や文章の構成など、国語の力がつく」「地元（地域）の情報がたくさん載っている」等をあげており、新聞の良さに気づいてはいるが、新聞を読んで情報収集したり、新聞を活用したりしてみようという積極的な態度はあまり感じられない。

2 新聞に関わる活動

学年行事のまとめとして、新聞づくり（3 年修学旅行新聞、2 年職場体験新聞・登山新聞、1 年宿泊学習新聞）を行っている。しかし、時系列に事実を並べただけで終わっている新聞が多い。また、社会科では毎年、夏休みの課題として新聞づくり（2 年歴史新聞、1 年地理新聞）に取り組んでいるが、インターネットや書物で調べた内容を記述するのみであり、考察が不十分な新聞が多い。

II 実践のねらい（N I E で高めたい力）

学習指導要領での国語の目標は「社会生活にかかわることなどについて、考えを広げようとする態度を育てる」「広い範囲から情報を集め効果的に活用する能力を身に付けさせる」である。また、新聞は社会生活を取り上げたものであり、様々な情報に基づいて作成されたものである。したがって新聞の特徴にせまるように、新聞を授業の中で教材化していくことは、国語の目標につながると思う。

そこで、本校では以下の 4 点を N I E で高めたい力と考え、研究・実践を行うことにした。

1 思考力

- ・新聞づくりの事例から、生徒は事実と意見の整合性を整えることが苦手である。そこで、意図に応じていろいろな事実を切り取っている新聞記事を用いて、事実と意見（意図）との関係に着目しながら読む学習を行い、事実と意見の整合性に気づかせたい。

2 判断力

- ・同じ記事でも多様なとらえ方がある。記事を読み比べる学習を行っていく中で、最後に自分はどうに考えるかという判断力を持たせていきたい。

3 表現力

- ・最終的には新聞記事を自分なりにまとめていきたい。事実と意見の関係を踏まえながら、事実を取捨選択して、自分の考えを文章で表現できるようにさせたい。

4 新聞への興味関心

- ・新聞を通して思考力、判断力、表現力を高めるためには、新聞に興味関心を持たせることも重要になる。

III 研究の概要

1 思考力・判断力・表現力を高めるために 【新聞で学ぶ】

- (1) 国語の授業で、事実の部分を空欄にして適当な事実をあてはめる授業の実践
- (2) 「信濃毎日新聞 学習シート」を用いた家庭学習
- (3) 同じ事実でも異なる立場で書かれた記事の読み比べ（各教科、道徳、学活）
- (4) 新聞の特徴を生かしたレポートづくり（各教科、総合的な学習の時間）

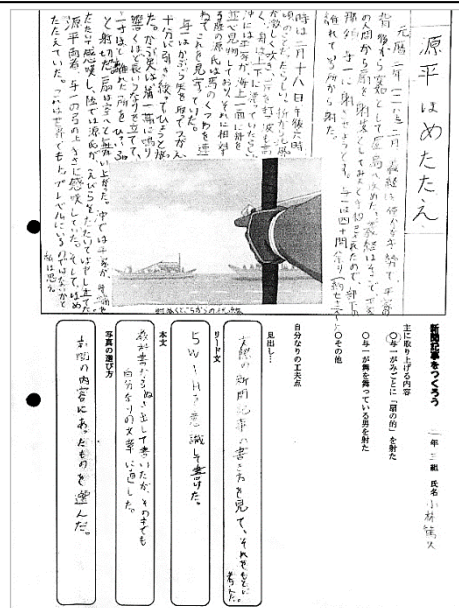
〔国語科での取り組み〕

事例①「モアイは語る」(2年)の学習のまとめとして、環境問題に関するスクラップ新聞を作成した。



事例②

「平家物語 扇的」(2年)で、本文の内容を新聞形式でまとめた。
「自分の立場を明確にして」書くことをねらいとした。



2 新聞への興味関心を高めるために 【新聞で学ぶ】【新聞を学ぶ】

- (1) N I Eの新聞コーナーを設置し、7紙の新聞を自由に閲覧できるようにする。
- (2) 学活(朝学活、帰学活)等で、新聞記事を紹介したり、読み聞かせを行ったりする。
- (3) 新聞記事から教科に関わる話題を切り取って掲示し、紹介する。



IV 授業実践 <2年国語科>

- 1 単元名 新聞から情報を読み取り、自分の考えをもとう
- 2 単元設定の理由

説明的文章「モアイは語る」を読み、「今ある有限の資源をできるだけ効率よく、長期にわたって利用する方策を考えなければならない」という筆者の意見に対して、自分の考えを書く授業でのことである。A生は、「筆者の意見は最後の部分を読めばわかる」と述べ、意見がどういう事実から導き出されているのか読もうとするまでには至らなかった。B生は、筆者の意見に対して「賛成である」という立場から考えを述べたが、筆者の意見と事実との整合性を踏まえた上で、賛成するまでには至らなかった。

このような生徒に、難民選手団について書かれた記事を読み、筆者が意見を導き出すためにどのような事実をあげているのか考える学習をさせたい。この記事は、ミセンガ選手やマルディニ選手のオリンピック出場に至るまでの経験を踏まえて、「難民選手団のオリンピック出場は、難民の

過酷な現状に目を向けさせることになる」という筆者の意見が導き出されており、事実と意見の関係を読むことにふさわしい教材である。

そこでまず、難民に関する複数の資料を読み、感想を発表し合うようにする。その上で、一部が空欄になったミセンガ選手の記事を読み、「新聞記事の空欄部分に何が入るか考え、ミセンガ選手がオリンピックに出るまでに何があったのか、知りたい」という学習へのねがいをもてるようにする。次に、記事の空欄に事実A・B・Cのどれが入るのか選択するようにし、その理由を書くように促す。さらに、意見部分の「過酷な現状」につながる事実はA・B・Cのどれか、「過酷な現状」を「困難な現状」に置き換えた場合と比較しながら話し合うようにする。最後に、この新聞記事を読んで、自分の考えを文章化するのである。

このように、新聞記事を用いながら意見につながる事実を選択する学習を通して、生徒は、新聞記事は、様々な材料を集めながら筆者の考えをまとめているものであることに気づくとともに、事実と意見との関係に着目して読む態度を身に付けるようになるだろう。また、難民の抱えている過酷な現状や難民選手団のオリンピック出場の意義について関心をもつようになり、ミセンガ選手やマルディニ選手の状況に思いを寄せながら、自分に何ができるのかという視点から自分なりの考えをもつようになるだろうと考え、本単元を設定した。

3 単元の目標

(1) 全体目標

事実と意見との関係に着目しながら、難民の抱えている過酷な現状や難民選手団のオリンピック出場の意義について自分の考えをもつことができる。

(2) 具体目標

関：読むことへの関心・意欲・態度 読：読むこと

伝：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

関一ア 難民に関する資料を読み、感想を書いたり、発表したりしようとしている。

関一イ 友の感想を踏まえながら、自分の考えをもとうとしている。

読一ア 事実と意見との関係に気づくことができている。

読一イ 新聞記事を読み、事実と意見との関係を踏まえながら、自分なりの考えをもつことができている。

伝一ア 同じような意味の言葉同士を比較し、その違いを考えている。

4 単元展開の概要

過程	学習活動	生徒の意識(◎)と教師とのかかわり(・)	目標	時間
導入	1 難民に関する資料を読み、感想を発表し合い、学習へのねがいをもつ。	- 一部が空欄になったミセンガ選手の新聞記事を範読し、感想や疑問を発表し合うように促す。 ◎難民について詳しく知りたい。 - 難民の様子を示した写真や難民の数、難民受け入れ問題、難民が生まれる要因、難民のオリンピック参加に関する資料を提示し、感想を書き、発表し合うように促す。	関一ア 関一イ	1

		◎「難民のオリンピック参加をきっかけに、難民の抱えている苦しみ等について、考えていきたい。」 ・事実の空欄には何が入るのかを考えるように促す。	関—ア 関—イ	
展 開	2 記事の空欄に当てはまる内容を考える。	◎新聞記事の空欄に何が入るか考えたい。 ・空欄に入る内容としてA・B・Cの3つの中から考え選択するように促す。	読—ア 伝—ア	2
		A 代表になったプレッシャーで、合宿所から逃げ出す日もあった。 B 戦争中にスポーツを楽しんでいてよいのかと批判されることもあった。 C 紛争で人の心は荒廃し、負けるとコーチに何日も監禁された。		
		・事実と意見に着目をしながら記事を読み、空欄にはA・B・Cの何が入るか考え、選んだ理由を書くように促す。		
ま と め	3 記事の空欄に当てはまる内容を話し合う。	◎新聞記事の空欄にはA・B・Cのどれが入るのか、友の考えも聞いて考えたい。 ・A・B・Cの叙述と本文の叙述がどうつながっているか明確にしながら話し合うようにする。 ・「過酷な現状」につながる事実はなにかという視点から話し合うように促す。 ・「過酷な現状」を「困難な現状」に置き換えた場合に、空欄に入る内容が変化するのか考えるように促す。	読—ア	3 本 時
	4 新聞記事を読んで、改めて考えたことを発表し合う。	◎ミセンガ選手やマルディニ選手の記事を読み、改めて自分の考えを整理したい。 ・「自分がミセンガ選手やマルディニ選手の状況に置かれたらどうするか」「自分たちに何ができるのか」という視点から考えを書くように促す。 ・自分の考えと友の考えを交流するように促す。	読—イ 関—ア 関—イ	4

5 本時案

(1) 主 眼

新聞記事の空欄に事実A・B・Cのどれが入るか考えたいとねがいをもった生徒が、A・B・Cと記事の内容との関連性に着目したり、「過酷な現状」につながる事実はなにか「困難な現状」に置き換えた場合と比較しながら話し合ったりすることを通して、監禁されたというCの事実が筆者の意見と整合することに気づくことができる。

(2) 本時の位置（全4時間中 第3時）

(3) 展 開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導	評 価	時間
導 入	1 前時を振り返り、学習課題を設定する。	ア前回の授業では、私はAが入ると思ったけど、まだ、自信がもてない。 イ Bが入ると思ったけど、他の人の意見も聞いてはつきりさせたい。	◇前時の自己評価を発表するように促す。 ・ア、イの発言をとらえ、学習課題を設定する。		5

／ 展 開		学習問題：記事の空欄部分には事実 A・B・C のどれが入るのだろう。 ウ自分とは違う選択をした友達に、どうしてそのように考えたのかを聞く。 エ A・B・C の内容と本文の内容とつながる部分を確認すればよいと思う。	・「記事の空欄部分には事実 A・B・C のどれが入るのか分かるためにはどうすればよいのか」と問う。 ・ウ、エの発言から学習課題を設定する。	5
		学習課題：本文と A・B・C の記事とのつながりに着目して、記事の空欄部分に事実 A・B・C のどれが入るか話し合おう。		
	2 記事の空欄部分には A・B・C のどれが入るか全体で話し合う。	オ空欄の前に「国の代表になったが」と書かれていて、国の代表でプレッシャーも感じただろうから、A の「プレッシャーで逃げ出した」とつながると思う。 カ B は戦争のことを取り上げているので、「戦争は…死と混乱を招いた」という部分とつながると思う。 キ B のスポーツができないという事実を踏まえて、ミセンガ選手は記事の中にあるように「まともな生活がしたい」と思ったのではないかと思う。 クもう一人の難民であるマルディニ選手が、海に飛び込んで死ぬ恐怖を体験した例が書かれているので、ミセンガ選手も同じくらい危険だったことを伝えるために C の監禁という体験を書いたのだと思う。 ケ記事の最後に「過酷な現状」とあるから、ミセンガ選手は相当大変な経験をしてきているはずなので、それにふさわしい事実の方がよいと思う。 コ筆者の最も言いたいことは難民が「過酷な現状」であったということだから、それに関係する C の事実を選ぶと言いたいことが伝わると思う。	◇記事の空欄部分に事実 A・B・C のどれが入るのか話し合うように促す。 ・A・B・C の叙述と本文の叙述がどうつながっているか明確にするように促す。	15
／ 終 末	3 筆者の意見につながるのは事実 A・B・C のどれかグループで話し合う。	サ「過酷な」は厳しすぎるという意味だから、一番厳しい状況を表した C とつながる。 シ「過酷」と「困難」は両方とも同じような意味だけど、過酷の方がより厳しい様子を表しているから監禁されたという C の方がよいと思う。 ス「過酷」は酷過ぎると書くから、「コーチに監禁された」という C の事実とつながる。 セ「過酷」は生きるか死ぬかといった状況を指すから、監禁という事実とつながる。	A・B・C のどれが入るか考える場面で、以下の 3 点から評価する。 ①空欄とその前が、逆説の関係にあるという点に着目している。 ②記事と A・B・C の内容の共通点に着目している。 ③筆者の意見と事実との整合性に着目している。 *①②の生徒は③の考え方をしている生徒の意見に触れさせることで、事実と意見との整合性について考えられるようにする。	
	4 本時の学習を振り返る	ソ紛争で人の心は荒廃し、試合で負けると監禁させられるというあまりに酷い C の事実が空欄に入ること、筆者が最も言いたかった「オリンピックは難民の人の過酷な状況に関心を向ける機会となる」ということが、強く読み手に訴えられるということが分かった。	◇ケ・コのような発言をとらえ、過酷な現状という言葉につながる事実は A・B・C のどれか、グループで話し合うように促す。 ・「過酷な」ではなく「困難な」だった場合どうなるか考えるよう促す。 ・全体で意見を共有するように促す。	15
		ソ紛争で人の心は荒廃し、試合で負けると監禁させられるというあまりに酷い C の事実が空欄に入ること、筆者が最も言いたかった「オリンピックは難民の人の過酷な状況に関心を向ける機会となる」ということが、強く読み手に訴えられるということが分かった。	◇本時の学習を振り返り、自己評価をするように促す。 ・「何に着目することで何がわかったか」という観点から自己評価をするように促す。	10
		事実と意見との整合性に気づくことができたか、自己評価の内容から評価する。		

難民選手団五輪精神を反映

【リオデジャネイロ共同】乱取りで相手をにらんだ眼光鋭い目は、豊を離れた途端に穏やかになった。紛争が絶えないコ

ンゴ（旧ザイール）から五輪を控えるリオデジャネイロに「アリガトウ」と日本語でほほ笑んだ。2常に感謝の念を抱いて暮らしているという。戦火に追われて家族と離れ

コンゴからブラジルへ

心を救った柔道



リオデジャネイロ市内の道場で練習する「難民五輪選手団」柔道男子90kg級のポボル・ミセンガ（左）6月22日（共同）

難民五輪選手団のメンバー

名前	年齢	出身	競技・種目
ジェームズ・ニアン	28	南スーダン	陸上400m
イエチ・ブル	21	南スーダン	陸上800m
男 子			
パウロ・アモトゥン	24	南スーダン	陸上1500m
ヨナス・キンデ	36	エチオピア	陸上マラソン
ラミ・アニス	25	シリア	競泳100mバタフライ
ポボル・ミセンガ	24	コンゴ（旧ザイール）	柔道90kg級
女 子			
ローズ・ナティケ	23	南スーダン	陸上800m
アンジャリン・ナダイ	21	南スーダン	陸上1500m
ユスラ・マルディニ	18	シリア	競泳100m自由形
ヨランダ・ブカサ	28	コンゴ（旧ザイール）	柔道70kg級

※年齢は国際オリンピック委員会発表による

3 柔道は「親を失った僕に安らぎをもたらしたし、熱意を呼び覚ました」という。競技に打ち込み、母国の代表になったが、紛

争はあまりにも多くの死と混乱を招いた。まともな生活がしたい」と亡命を決意した。

4 難民支援団体の仲介で、リオ市内の柔道教室で稽古を続けてきた。非

政府組織（NGO）が貧困家庭の子どもの非行防止を目的に運営するこの道場では、元五輪メダリストとぶつかることもあれば、小学生に胸を貸すこともある。リオっ子たちのかめくもりを日々感じ「メダルを持ち帰って感謝の気持ちを伝えたい」と目を下げた。

5 五輪初の試みとして特別参加する難民選手団には、内戦による混乱が続く南スーダンやシリアなどの出身者でさまざまな理由で故郷を失った10人が選ばれた。競泳女子自由形のユスラ・マルディニは多くの難民とともに昨年、シリアを逃れた。定員オーバーのゴムボートから海に飛び込み「競泳選手が海で死ぬなんて」と恐怖に駆られながらも、必死に泳いで欧州にたどり着いた。ミセンガやマルディニらの出場は華やかな五輪の陰で、難民が置かれた過酷な現状に世界の関心を向けさせる機会となるだろう。

6 授業の実際 「友の読みに触れながら、事実と意見の関係に着目し始めたM生」

(1) M生の当初の考え

【学習カード】

Bだと思う。理由は、リオの小学生に胸を貸したり、リオっこにぬくもりを感じたりしているからプレッシャーはない。だから、逃げ出すことはないのでAではない。CはNGOの道場だから、コーチが監禁するなんてあり得ない。

【考察】

M生はCの「監禁」という事実は、道場としてはあってはならないという主観的な考えが先行し、筆者の意見である「難民が置かれた過酷な現状に世界の関心を向けさせる機会となるだろう」に照らし合わせて、A・B・Cの事実を選択するまでにはいたらなかった。

(2) 授業終末時のM生の考え

【学習カード】

Cの「監禁された」という部分が筆者の意見の「過酷な現状」につながると思っていたけれど、J君の意見を聞いて、Bの「スポーツを楽しんでいてよいのかと批判された」も柔道にかけているミセンガ選手には、とても過酷なことだと思った。だから、事実との関係を考えることが大切だと思った。

【考察】

授業を通してM生は、筆者の意見である「過酷な現状」と照らし合わせて、A・B・Cのどれがよいかを選択することができるようになった。

(3) M生が事実と意見との関係性に気づいた要因

授業の中で次のような場面があった。

【空欄にA・B・Cのどの事実が入るかを話し合った場面】

D生：「ブラジルに移住して代表になったので、2段落にあるように、ものごとに感謝してという大きな思いが詰まっている。だからAだと思います。」

E生：「3段落の空欄の後に『亡命した』と書いてある。柔道をすることを批判されていたから亡命したのではないかと思う。だからBだと思う。」

F生：「BとCで迷っている。空欄の後を読むと、『まともな生活をしたい』とあるので、コンゴでは柔道で楽しんでいたと思われなかったと思うのでBだと思う。また紛争でまともな生活を送れていないからCともいえる。」

G生：「5段落の最後を見ると、『過酷な現状』と書いてあるから、『監禁』とつながりやすいと思う。」

H生：「5段落に筆者が『世界の関心を向けさせる』とあり、Cのような過酷さを訴えることで、世界の関心を向けさせるようとしたのではないか。」

教師：「たしかにこれまで出された意見を整理すると、A・B・Cのどれも、文章のどこかにはつながっているし、文の流れとしても、自然だと言えます。しかし、ただつながっていればよいというのではなくて、G生やH生は、筆者が一番言いたいこととつながっていることが大切だということだね。そこで、A・B・Cをみて、改めて筆者の意見とつながっているものはどれか話し合ってみてください」

(グループでの話し合いの後)

I生：「筆者が言いたいのは『過酷な現状』に世界の関心を向けさせることだと思う。Aは過酷じゃないし、Bもちがう。Cの『監禁』が一番過酷。」

J生：「ぼくはBだと思う。ミセンガ選手の心を救ったのは柔道で、とても大切なものだと思う。その大切さはぼくにとってのゲームと似ている。だからミセンガ選手にとって柔道をやめるということが一番過酷なのではないか。」

M生：（大きくうなずく）

【考察】

M生はJ生の意見を聞いて大きくうなずいている。これは、筆者の意見である「過酷な現状に世界の関心を向けさせる」と事実B・Cとの関係を考え、Bの「スポーツを楽しんで批判される」という事実は、ミセンガ選手にとってはかなり過酷であると納得した姿である。授業者が正解としていたCとは異なる意見だが、事実と意見との関係を読ませたいというねらいにはつながっていた。事実の部分为空欄にして何が入るか考えるようにし、友とどういう事実が入るか話し合うようにしたことで、事実と意見との整合性について、考えることにつながった。

また、M生はBとCとを比較して、どちらが筆者のいう過酷に近いか考えている。これは、自分だったらBとCのどちらが過酷な状況であるか、評価した読みの姿である。一つの事実を読むだけでなく、BとCのどちらが意見につながるか比較し合う活動が、評価しながら読むといった主体的な読みを育んだ。

V 成果と課題

1 「思考力・判断力・表現力を高めるための授業の実践」について

- 事実の部分为空欄にして、どの事実が入るか考えるようにしたことで、生徒は意見と事実との整合性について気づくことができるようになった。
- 友と話し合いながら、どの事実が筆者の意見とつながるか、文章に取り入れる事実の違いを比較することで、事実と意見との整合性を評価する態度を身につけることにつながった。
- 「過酷」について、全体で意味を確認したり、その状況を考えたりする活動があれば、もっとCである理由が生徒の中にしっかりと理解できるようになったと思われる。

2 次年度にむけて

今年度は、「思考力・判断力・表現力を高めるために（新聞で学ぶ）」について、国語科を中心に実践を行った。研究授業以外でも事例①②のように、新聞を活用した取り組みもだんだんと増えてきた。次年度は、「信濃毎日新聞 学習シート」を用いた家庭学習、記事の読み比べ、新聞の特徴を生かしたレポートづくりについて、他教科での新聞活用の実践をさらに積み重ねていきたい。